

Kix プレセミナー2「iPad、Kindle、EPUB...電子出版にまつわるフォーマット議論の先に何があるか～プロセスのデザイン、制度のデザイン、組織のデザインの考察」(2010年6月25日開催@JAGAT) 要約



2010年6月25日 14:00より、Kix プレセミナー2「iPad、Kindle、EPUB...電子出版にまつわるフォーマット議論の先に何があるか～プロセスのデザイン、制度のデザイン、組織のデザインの考察」が開催された。このKix プレセミナー群は、次世代(具体的には約10年後)のメディアはいかに設計されていくべきかを探るもので、プレセミナー0と位置づけられるものが2月にPAGE2010内で開催された(「次世代のメディアデザイン」<http://www.jagat.jp/content/view/1674/378/>)。プレセミナー1は5月に開催(「電子出版の状況整理と無料経済の関係～黒船『電子書籍ビジネス』に対するメディア再構築を考察する」<http://www.jagat.jp/content/view/2009/105/>)。

講師はアスキー総合研究所の遠藤諭氏、産業技術総合研究所の和泉憲明氏、ソシオメディア株式会社の川添歩氏、そして慶應義塾大学の増井俊之氏。モデレータはスタイル株式会社の竹田茂氏。

本稿は要約です。詳細版の公開も検討しています。

最初にモデレータの竹田氏から全体の概要について。

iPad や Kindle などの盛り上がりにより電子書籍ビジネスに熱い視線が寄せられているが、EPUB へどう対応していくか、電子出版はようになるかなどの議論は巷に溢れているが、新しいコンテンツビジネスをつくっていくためにはこの方向でいいのだろうか。デザインするべきものは他にあるのではないだろうか、という視点で考察していきたいと述べた。

最初に遠藤氏から、アスキー・メディアワークス社の「MCS(メディア&コンテンツサーベイ)2010」および「電子書籍利用意向調査」からの、スマートフォンや電子書籍に関するトピックの紹介。

電子書籍は日本では500億円市場といわれているが、約30%が利用を検討しているという調査結果が出ており、日本語版 Kindle に約20%が興味があることを示した。日本語版 Kindle については、全体に比べて20代が最も興味関心があり、40代が低い。ただし50代以上になると若干高くなる。電子書籍の最大の魅力については、「場所を取らない」「いつでもすぐに入手できる」「持ち運びが楽」などが挙げられており、概ね本の物理的なイメージが反映されている。また、電子書籍に対する懸念・不安材料としては、「紙でないと読みづらい、目が疲れるのでは」という意見が圧倒的であった。

ここで、iPhone を実際に買っている層はどういう人たちなのか、という考察。調査によれば Mac と iPhone を両方所有しているより iPhone のみを所有するユーザのほうが多く、なかでも20代の「iPhone のみ利用者」が多い。休日を「恋人とのデート」「キャリアアップのための学習、資格取得」などに費やす、ポジティブな層であることがわかってきた。いま実際にスマートフォン、なかでも iPhone へ興味に向かうゾーンは20代なのであるということである。

参考データとして、iPad 発売直前に行われた調査にも触れた。iPad を購入検討している人々というのは、比較的中高年層であるのだという。iPhone 購入者との重なりも25%程度しかなく、iPhone を所有している層が iPad を買っているわけではないという仮説である。従来の PC 利用者と違う、20代を iPhone は取り込めており、iPad を買う層というのは中高年層。これにより日本のデジタルデバイドが緩和されるのではないかとした。

次に「今ここにあるべき電子書籍」と題して、川添氏から。

電子書籍に関する議論の前提として、「本(書籍)」の果たしてきた役割、役目をもう一度見つめなおす必要があること、それをせずに電子化やネットワーク利用で新しいことをやると難しいのではないかとした。本が知的生産であるとして、「知的再生産」を支援するサービスというところが重要であるということである。デジタルのメリットとは何かということだが、「完全な複製が可能」「容易に編集」「高速に検索」「限りなく安価」などがあげられる。しかし果たして電子書籍の電子の部分で、これらをユーザは享受できているだろうか。また、書籍として捉えた場合に、本で当たり前に行っていたことができない、という点がある。現状では電子書籍がアプリ形式で供給されていることもあって、それぞれのユーザーインターフェースが異なる。ページ送りやメニュー表示など、それぞれ微妙に異なることは本を読むという行為に対して、単に具合が悪いことになる。

読書体験のクラウド化について。例えば Kindle では、Kindle 端末で読み進めて途中でやめたとして、PC 上で続きを読めるような機能は実現している。そして一部ではあるが、読書の共有化というのが始まっている。電子書籍を読んでいて下線をひいた箇所が他者に共有できる仕組みである。この「蓄積と共有」はデジタルとネットワークを活用したもので従来の本にはない。「どこまで読んだか」「どのくらいの時間で読んだか」

「何回読んだか」「持ち歩いている期間」などがユーザ側のコンテンツになるということである。この考えを発展させれば、単なる下線だけでなく書き込みを共有できたり、注目している場所をヒートマップにして可視化できたりする。また本全体のヒートマップを作ることも創造できる。

こういったサービスが実現するためには、情報が変化し続ける前提の Web では考え方を変えていくことも必要になる。書籍はコンテンツの固定化ともいえ、永続的なアクセシビリティがある。読書体験のクラウド化も、コンテンツの固定化が確定されていないと蓄積も共有もできないわけである。固定化のためには、一定の基準でコンテンツの質をクリアしていくことが求められる。ここに編集者や版元の将来の役割もみえてくる。

続いて増井氏より、「ユーザ目線の電子出版」。

氏の iPad、Kindle の経験としては、課金に対するハードルが低くなっていること、全て持ち歩くということが精神的に楽であるということがある。iPad は他に受動的な利用用途としては、フォトフレームやスクリーンセーバをはじめ様々な使い道がある。問題点もあり、DRM があつたり iTunes を経由しなければならぬなど自由度/開放性の問題、先ほどの川添氏も挙げられたナビゲーションの問題もある。

DRM について、そもそも制限していることは将来読めなくなる可能性が考えられるし、実際の本にある譲渡や共有という簡便性がない。そういった面で制限していることは非常に危険だと捉えるわけだが、その DRM を避ける方法としては、電子透かしを利用することや、購入者情報を埋め込むということが考えられる。これはわざわざ公開するリスクとのバランスを考え、抑止効果として働く。電子コミックなどで実際に電子透かしの技術もあるし、技術的には可能である。

ナビゲーションについて。脳はランダムアクセスだが、(電子の)出版物については現状は階層アクセスもしくはシリアルアクセスである。本をばらばらとめくるようなアクセスがしづらい。リンクを張り巡らすような、ランダムアクセスを実現できるものが電子出版にあってもいいのではないか。リンクは仕組みとしては比較的簡単で、なおかつ自分で構築するリンク集は価値が高い。タグは後で役立つかもしれない一方で簡便ではないが、リンクはすぐに役立つ面がある。人間には編集欲があり、小さな問題は直したくなる。Wikipedia の成功はその積み重ねである。Lang-8 というサイトなども参考になる。

検索と入力との接近という考え方がある。検索したものは入力可能だし、入力したものは検索可能である。同様に、読書と著作も接近するのではないだろうか。そのような状況が促進されるのではないだろうか。

最後に和泉氏よりサービス工学について。

サービス工学という学問は「社会」を対象とするが、その理由として自己の作ったサービスを広く社会に押し付けてはいないかという自問自答がある。名著「なぜ IT は社会を変えないのか」でも述べられているが、自分たちのつくったテクノロジーを広めるためにはどういう視点が必要であるか、ということである。有名な「イノベーションのジレンマ」では、優良企業は正しいことをつきつめていくと失敗する、といったことが書かれている。これについての様々な議論を含めて、技術と社会の橋渡しが必要ではないかということである。

サービスはライフサイクルと持続可能性を考える。よくサービスの提供者とサービスの利用者だけを考えがちだが、そうするとイノベーションのジレンマを目の当たりにすることになる。社会全体の最適化に直結するような持続プロセスを形式化するために、提供者と利用者以外に、観測者と設計者を加える。提供者から利用者にサービスされ、それを観測する立場があり、その助言をもとに設計者が制度をつくる。このように

なっていないと持続可能性を見出せない。

サービスの定義を振り返ると、自分が自分自身に機能を提供することである。食事の提供を例にすると、これまで調理道具や食材の提供などモノの販売があって、利用者が料理していた。ここに食事を提供するというサービスの考え方が取り入れられると、サービスの提供者は料理を利用者に提供する。しかしここで注意すべきことは、本質は「空腹を満たす」ということであり、「食事を得る」ということではないことである。機能とインフラを分離しなければならない。食事を出すことがサービスではなく、空腹を満たすという機能をサービスとして考えないと、サービスの改善などを見込めなくなる。電子出版においても、モノから機能を分離して、何が提供できるのが検討してみる必要がある。

コンテンツにより電子出版が知的になるというのはハードを強く意識しすぎた考え方である。コンテンツが流通するライフサイクルのなかでどのように知的になるのか、メディアから情報をどう切り出すかがポイントとなる。電子化されるというプラットフォームの移行がポイントではない。コンテンツの利活用を考え、これからの publishing がサービス化する議論はハードウェアでは語れないのではないだろうか。知的生産性を知的再生産と捉えると良いのではないだろうか。

本稿は要約です。詳細版の公開も検討しています。